［投稿論文：研究論文］

日本に暮らすムスリム第二世代
当事者の語りから見える葛藤の様相

Second Generation Muslims in Japan
Their Perceived Internal Conflicts Made Apparent Through Interviews

クレシ 好美
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程
Yoshimi Qureshi
Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University
Correspondence to: sarahq@sfc.keio.ac.jp

Abstract: 1980 年代以降の外国人ムスリムの流入を経て、国内にもムスリム家庭が形成されている。そこに誕生する第二世代は幼い頃からイスラームの価値観のもとに生育するが、中には、学童期から差異を意識し続け家庭の価値観と級友らのそれとのギャップに苦しみ、青年期にはムスリムである属性にどう向き合うべきか悩みながら「自分とは何者か」の問いに答えを見つけようと懊悩する者もいる。マイノリティの存在であることを意識し成長するかれらがどのような葛藤を抱えいかにして乗り越えようとするのかを、当事者の語りから考察する。

Muslim families are formed in Japan since an influx of Muslim immigrants in the 1980s. Second-generation Muslims born into such homes are nurtured in Islamic values. Among them, some from their school-age become deeply troubled after recognizing differences between the values of their family and that of their peers. In their adolescence, they contemplate how they are to come to terms with the Muslim identity, attempting to identify who and what they are. In this paper, the internal struggles they face as a minority, as well as their efforts to overcome such challenges will be examined through interviews.

Keywords: ムスリム、第二世代、葛藤、イスラーム、マイノリティ
Muslim, Second-generations, internal conflicts, Islam, minority

1 はじめに
1.1 研究の背景

1980 年代以降急増したニューカマーと呼ばれる滞日外国人の中には、長期にわたり滞日する外国人ムスリムがいる。その数は今や 18 万人を超え（大橋 ,

2021, p. 225)、自国から配偶者を呼び寄せあるいは日本人と国際結婚して形成されるムスリム家庭は1万9千世帯と推計される(店田, 2018, p. 116)。そこに誕生し日本で育つ子は、外国にルーツを持つムスリム第二世代〔以下、第二世代〕である。その多くは、外国につながる背景に加え、親の出身国と日本の文化習慣を並行して身につけながら、宗教的な価値観の影響を強く受けて育つ。本研究は、こうした複数の背景・多様な価値観のもとで「自分とは何者か」への答えを探しながら成長する第二世代の葛藤の様相を明らかにすることを目指す。なお、両親ともに日本人の子らも少数ながら存在するが[1)]、第二世代のほとんどに共通する外国ルーツの要素に焦点を絞った考察を行うため、ここでは扱わないこととする。

第二世代の親の組み合わせで最も多いのは外国人父と日本人母、続いて両親ともに外国人、日本人父と外国人母である[2)]。苦労して日本語を獲得し努力して異国の文化や習慣に合わせてきた外国人親世代と異なり、日本で教育を受けた第二世代は一見違和感なく日本社会に溶け込んでいるように見える。しかしかれらの中には、第二世代特有の生き難さを抱える者がいる。社会では多様性の尊重が叫ばれているものの、学童期から青年期[3)]の第二世代が毎日を過ごす学校では同化主義的傾向が強く(杉本, 2002, p. 152)、肌の色や顔立ちなどの外見上の差異はからかいの対象になり、宗教的にも文化的にも周縁化されがちな現実がある。幼い頃から家庭で培った価値観が級友のそれと異なるギャップに戸惑い、周囲に同化したいという強い願望と親の信頼を裏切ってはいけないという思いの狭間で葛藤しながら成長する第二世代は、ムスリムの属性とどう向き合いながら自己を定義していくのだろうか。

1.2　先行研究

ムスリム移民の流入が日本より早いヨーロッパでは、第二世代研究の蓄積がある。かれらが非行や暴力に走りまた過激派組織に引き付けられる背景に、言語適応にハンディキャップを負うがゆえの経済格差と教育格差の連鎖があることが示され(宮島, 2016;マンスール, 2016)、そうした現状を変えるものとして、ドイツのヒズメット運動やフランスのアルジェリア系移民の学校適応策などの教育に期待が寄せられる(石川, 2016;植村, 2016)。一方イギ

リスでは、教育レベルの比較的高い第二世代が信仰を維持しながら社会統合に成功している事例も報告される（安達，2013）。暴力的実態は、現時点において日本の第二世代を特徴づけるものでないが、ホスト社会に溶け込めないことによる孤独や不満は共通しており、その分析は喫緊の課題と思われる。

日本に目を向けると、いわゆる「ハーフ」研究における子の証言に共通するのは、外見上の差異による周縁化の経験である（下地，2018；岩渕，2014）。日系南米人第二世代を対象とした調査からは、家庭での文化継承が日本社会における位置づけや地位達成に影響を及ぼすことが（関口，2007；角替，2015）、フィリピン系第二世代を対象とした調査からは、文化継承の度合いがかれらのエスニシティ選択を左右することと、捉え直しの契機を経てエスニシティの否定が肯定に変わるケースがあることが明らかにされる（三浦，2015；三浦・坪田・額賀，2016）。ムスリム第二世代にも、これらの経験は程度の差こそあれ共通するが、加えて親からの宗教実践への強い期待を負う点にも着目する必要があるだろう。

日本に暮らすムスリムについては、これまで主に親世代を対象に研究が進められてきた。宗教実践を中心とした生活実態が報告され（桜井，2003；樋口，2007）、コミュニティを築いていく様子やモスクに関する詳細な調査が行われ（店田・岡井，2008；同，2009）、またかれらとの結婚を機に入信した日本人女性の心の動きや生活も明らかにされるが（竹下，2003；工藤，2008）、その子世代については、教育の文脈で語られることが多い。給食や一部の授業に特別の対応が必要であることが提言され（杉本，2002;丸山，2007）、店田・岡井（2010）によるムスリム親世代への調査でも、給食と授業内容が学校教育への不安として最も多く挙げられる。だがそれに次いで、学校のイスラームへの理解やいじめが挙げられており、学校制度の改変だけでは解決しない問題が提起された点で新しい。とはいえ、2007 年から 2008 年にかけて行われたこの調査が扱う子の年齢は平均 8.6 歳であり、第二世代が学童期から青年期にかけて直面する問題を検証するには時期尚早であった。

第二世代の声が研究に反映されるようになったのは、ここ数年のことである。工藤（2016）はパキスタン人父と日本人母を持つ子への聞き取りを通し、いわゆる「ハーフ」として差異化されるかれらが日本社会の中で排除の経験

を重ねながら自己定義する様を述べる。2015 年以降は、研究者主催の会議で第二世代を含む若いムスリムが自らの経験や現状を語る機会も増えてきた[4)]。しかし、当事者による貴重な発言は議事録に残るのみであり（岡井・店田・小島 , 2015；岡井・店田 , 2019a；同 , 2019b：店田・岡井・小野 , 2020；野中 , 2020）、今後これらを学術的に分析し考察する作業が期待されている。

1.3　本研究の課題

研究者の関心に第二世代の成長が追いついた今こそ、第二世代研究を本格化させる適期である。しかし、工藤の先行研究で証言する子 8 人の父がすべてパキスタン人であり、研究者主催会議に登壇する第二世代がかなりの頻度で重複している点で[5)]、十分な事例が研究に反映されているとは言い難い。また、国内各地のモスクでは親に連れられて来る幼い子は多いが、自分の意思で来る中学生以上の第二世代を見かけることは滅多にない。むしろこうしたムスリム・コミュニティを敬遠する第二世代こそ、自身の文化的宗教的背景を肯定できずに懊悩している可能性が高いが、かれらの存在はコミュニティから見えにくくアプローチが難しい。親の国籍を限定せずに、自身の属性に戸惑う第二世代にまで調査の対象を広げるためには、コミュニティとの緊密な関係構築に加えて、多くのムスリムとのネットワークの活用が有効であろう。

そこで本研究は、筆者自身がムスリムとしてまた親世代の一人としてコミュニティに深く関わってきた立場から、幅広い属性を持つ第二世代の声を掬い上げることを試みるものである。昨今広がりをみせる当事者研究は、研究者の問題意識や動機の強さ（松本 , 2002, p. 96）、その文化の用語を知っていること、研究対象へのアプローチの容易さ、人間関係の構築しやすさ（鈴木 , 2010, pp. 69-70）などが評価されるが、第二世代当事者に非常に近い存在である筆者もまた、これらの利点を相応に有すると考える。重層的なマイノリティの要素を持つ第二世代が、外見上の差異・家庭での文化継承・宗教実践に関する期待にどう向き合い、どのような属性の捉え直しの契機を経て自己定義するのかを、当事者に近い視点から分析し考察し、既存の学知に反映させることを目指したい。

1.4　本研究の対象と方法

モスクの数も少なくインターネット普及率が低かった1990年代、イスラームの知識習得や情報交換の機会は乏しく、子がムスリムとしての自覚を培う場は主に家庭であった。家庭の影響を考察するためには、この時期に学童期や青年期を送った第二世代の経験を知る必要があると考え、ムスリム間のネットワークを利用して、関東・中部・関西・九州に在住のすでに成人した第二世代15人から協力を得た。13人には対面で(うち1人はメールで追加質問)、2人にはメールを利用し、2016年8月から2020年1月にかけて聞き取りを行った。質問項目は、家庭環境による影響のほか、学童期から青年期にかけての周縁化の経験、捉え直しの契機、現時点での自己定義についてであるが、調査協力者の自由な語りによってさらに話題が広がることもあり、それらすべてを参考にさせていただいた。人物の特定を避けるため個別の属性は伏せるが、外国人父と日本人母を持つ子が7人、両親ともに外国人の子が5人、日本人父と外国人母を持つ子が3人であり、外国人親の国籍はパキスタン・バングラデシュ・インドネシア・イラク・スリランカである。

このほか、調査協力が難しい第二世代に代わって、かつての子育てについての聞き取りに対する承諾の得られた親世代5人の語りをも調査データに加えた。また、筆者が1994年3月から2004年7月まで毎月参加していたムスリム・コミュニティ内のお茶会で、日本人母(不特定多数)により頻繁に語られた話題も補足的に参考にした。

発言引用の際は[6]、第二世代には数字を親世代にはアルファベットをそれぞれ登場順に割り当てることとし、その簡易的プロフィールを表1に示す。なお本研究の目的は、調査協力者に固有の経験から垣間見える第二世代の葛藤の様相を検証することであって、個々の発言により第二世代の経験を一般化するものでないことを始めに断っておく。

表１　調査協力者と親の詳細（年齢は聞き取り時のもの）

調査協力者（第二世代）の詳細															
	性別 年齢	ムスリムの属性	父親	母親		性別 年齢	ムスリムの属性	父親	母親		性別 年齢	ムスリムの属性	父親	母親
子１	女 27	否定	外国人	外国人	子６	女 24	葛藤	外国人	日本人	子11	女 20	肯定	外国人	外国人
子２	女 23	肯定	外国人	外国人	子７	男 22	肯定	外国人	日本人	子12	女 26	肯定	外国人	日本人
子３	男 21	肯定	日本人	外国人	子８	女 34	肯定	日本人	外国人	子13	女 22	肯定	日本人	外国人
子４	男 22	肯定	外国人	日本人	子９	女 20	葛藤	外国人	日本人	子14	男 40	肯定	外国人	日本人
子５	男 26	否定	外国人	日本人	子10	女 39	肯定	外国人	日本人	子15	男 26	肯定	外国人	外国人
第二世代を持つ親の詳細														
	子の性別・年齢	ムスリムの属性	本人	配偶者		子の性別・年齢	ムスリムの属性	本人	配偶者		子の性別・年齢	ムスリムの属性	本人	配偶者
母A	男 25	不明	日本人	外国人	母C	男 34	否定	日本人	外国人	母E	男 21	肯定	外国人	日本人
父B	男 34	否定	外国人	日本人	父D	男 26	否定	外国人	日本人					

2　差異を意識することで強まる同化願望

2.1　外見的な差異

「自分とは何者か」を問うのは青年期の主題である（鑪 , 1990, p. 61）。しかし他人と共有された世界で生きる学童期そして他人の目に映る自分の姿に心を奪われる青年期を（エリクソン , 2017, p. 144；同 , p. 151）、重層的なマイノリティの要素とスティグマに戸惑いながら過ごす第二世代にとって、この問いの答えを見つけることは容易でない。そうした自己定義を複雑にする要素の中で、最も早い時期に意識されるのは肌の色や顔立ちなどの外見上の差異であり、それはからかいやいじめといった不快な経験に始まる。

子１：いじめは小３から。外国人が学校で一人だけだったから。シカトされて、陰口言われて、ばい菌扱いされて。落としたものを拾ってあげようとしたら「触らないで！」って言われた。そういうのが小６までずっと、ネチネチと。でも親には言えない、今でも親は知らない。

子２：小学校から中２までずっといじめがあった、外国人だから。無視

とか陰口とか。〇〇〔県の名〕は外国人がそんなにいなくて、私が小学校で初めての外国人。

子 3：自分の外見は〇〇〔母の出身国〕人そのものなので、『国に帰れ！』『触らんで、俺は黒い肌になりたくない』のようなハーフによる嫌なことが主で（……）。

子 4：小学生の頃から周りと違うことが嫌やった。自分、耳がいいからクラスの子らの悪口が全部聞こえてしまうんで。いじめもあったし、たたかれたりもした。（……）中学の時は先生もいじめに加担してたな、なんか公開処刑みたいな。暴力的ないじめがひどくなってって、父が学校に怒鳴り込んだ。

子 5：保育園で、僕をいじめるとその子が先生にほめられるの。何でか知らない。顔が外国人だからじゃない？　仲良かったのはブラジル人の子だけ。

外見的な差異による不快な経験は早ければ就学前から始まり、学童期にはほとんどの第二世代が経験する。子 4 や子 5 の記憶にある教員の行動が実際どうであったか不明だが、少なくとも学校現場で頼りにしていた大人が、からかいやいじめを受けるかれらに助けの手を差し伸べる存在でなかったことは確かだろう。毎日を過ごす学校で理解者を得られない疎外感はかれらの外見に劣等感を抱かせる。それは「整形したいわ、みたいな。とりあえず肌の色変えるやろ、目小っちゃくするやろ（子 4）」、「テレビでやってる美白クリームのコマーシャル見て、あれ欲しいっていつも思ってた（子 5）」、「みんなと顔が違うことを気にして、小学生の頃よく『日本人のお面がほしい』って言ってた（母 A）」などの非現実的な願望に表れる。

年齢が上がるにつれかれらは、外見的な差異による周縁化を避けるため、内面での同調を試みる。子 2 が高校入学後いじめがなくなった理由を「コミュニケーション力が上がったから」と自己分析するように、子 4 も子 5 も高

校時代は級友らと良好な関係を築くことで不快な経験を回避している。だが性格によってはそうした努力が精神的負担になることもあり、「日本人になりたいという気持ちが強くて、みんなと一緒に合わせるために自分を縛りつけていた（母 A）」子もいる。

2.2　食の禁忌により意識される差異

ムスリム家庭において、多くの場合、子は生まれながらにムスリムとして育てられる。両親の示す世界がすべてである幼児期には、テレビコマーシャルや買い物先で見かけても絶対に買ってもらえない菓子があることに疑問をもたないが、そうした家庭の価値観が周囲のそれと異なると知るのは、就学後の給食の場面だろう。

> 子 6：給食は、豚以外の肉は食べてもオーケー。でも豚を除けて食べてると、『嫌いだからって残すんじゃないよ』って言われる。（……）自分がムスリムだってことはわかってる、でも認めたくない、しんどい。普通になりたいとずっと思ってた。

イスラームには豚肉を始めとする食の禁忌がある[7]。本来は禁忌の食材と一緒に調理した場合、それを後から除去してもすでにその料理は汚染されていると考え、また形としての肉だけでなくブイヨンや肉エキスにも注意しなければならない。これを避けるには弁当を持参させるのが最善だが、調査協力者らが学童期を送った時期は全員が同じ給食を食べることが奨励され[8]、個別の対応は認められにくかった。本来の原則に従って給食のおかず一切に手を付けさせない方針をとる家庭の子は小学校 6 年間ずっとパンと牛乳だけで過ごし、妥協することを選択した家庭の子は配膳された皿から豚肉を除けて食べる。いずれであれ、毎日の給食は子にとって周囲との差異を確認する場となる。級友からの視線を気にするあまり、「『お腹いっぱい』と言って食べないで帰ってきた（父 B）」子もいる。

> 子 1：小学校でお弁当だったのも恥ずかしかった。周りと違うことで萎縮

しちゃう。みんなと同じでいたいと、ずっと思ってた。

子7：中学の時、弁当箱に豚肉を入れられたことがある。中学でも高校でもずっと差別を受けてて、ケンカばっかしてた。

弁当持参が認められる場合、できるだけ周囲と同じようにと願う親は給食の献立と同じおかずを作って持たせ、温かいものを食べさせたいと願う親は給食の時間に合わせてできたての弁当を毎昼学校に届ける。だがそうした親の努力も、子にとっては差異をますます際立たせるものでしかない。

食の禁忌はからかいやいじめの好材料となりやすく、子7が受けた悪質ないたずらや、「豚をお前の口に突っ込んで、イスラームを壊してやる（子3）」、「なんで豚肉食べないんだよ、好き嫌いするんじゃねーよ（子8）」、「豚肉食べられないくせに（母A）」といった攻撃的な言葉につながる。不快な経験に傷つきながらも、幼い頃から培った家庭の価値観は食の禁忌への足枷となり、「みんなと同じでいたい」と望む子の中で「ムスリムであること」は「普通であること」に対立する属性として意識される。

食の禁忌が第二世代を悩ませるのは悪意ある攻撃だけに限らない。級友からの善意の気遣いが負担となることもある。

子2：ムスリムであることを嫌だなと思うのは、友達付き合いが面倒くさい。遊びに行ってもご飯食べに行こうってなるとこっちが申し訳ない。私のせいで行ける店が限られてきちゃうから。

子5：友達とみんなでご飯に行こうとすると『ちょっと待って、〇〇〔子5の名〕いるじゃん』ってなる。気を遣われるのが申し訳なくて、それが嫌で『いいよ行こうぜ』ってみんなに合わせるようになった。

高校から大学時代には、学校帰りや休日に友達と外食する場面が増える。周縁化の経験を学童期から繰り返してきた第二世代にとって、食の禁忌を理解してくれる友達は大切な存在であるからこそ気を遣わせたくない。食の禁

忌を優先して「友達に誘われても、その８割は親に言わないで断る（子 6)」子もいるが、同調を試みる子は「ムスリムであること」と「普通であること」の間で揺れる経験を繰り返しながら、ときに後者を前者に優先させる。子 5 は初め罪悪感に緊張しながら「普通であること」を選択したが、繰り返すうちそれも次第に薄れていき「高校生の頃には、もう自分はイスラームと関係ないと思ってた」と語る。そして大学進学を機に親元を離れて以降、「普通であること」を常に優先させた生活を送るうちにムスリムの属性を取り戻せなくなってしまい「ムスリムであることはあきらめた」と言う。

2.3　行動制限により意識される差異

外国人親が自らの出身国の規範に従って行動を制限する事例は、男女にかかわらず聞かれた。「中高大ずっとお泊りダメ、恋愛ダメ、帰宅が遅いと怒られる（子 9)」などはどれも親の出身国では当たり前のことであるが、日本で学校生活を送る子にとっては級友の誰のものとも異なる制限であり、その根拠や理由が示されないまま従うのは容易でない。

> 子 1:男と喋るな、女だから進学させない、男のいる職場で働くのはダメ。花火に行くのもバイトするのも許されない。謝恩会も出させてもらえなかった。友達と遊びに行くのもダメ。(……) 20 歳の時、遊びに行ったことがバレて、父から「歩いて帰れ」と言われて、何時間もかけて歩いた。家に着いたら、私のケータイの電話帳を上から全部一件一件かけて一緒にいたかどうか確認されて。その後は携帯電話を取り上げられて外出禁止。半年間大学にも行かせてもらえなくて、精神的に抜け殻状態でした。

父権制が強い国出身の外国人親の中には、権威主義的な父親像を模範とする親がいる。そこでは「教育は、子ども自身の意思をくじくことを目標とするプロセスとして理解され〔中略〕、命令し、罰を与え、侮辱し、心を折る（マンスール , 2016, p. 122)」ことで子をおとなしく従順にさせる。「すぐに激怒する、すぐ大声を出す人」である親の叱責とそれに伴う罰を恐れて指示に従い続けた子 1 は、成人した現在も大きな声に恐怖を感じる。父権制の影響は、実は程度

の差こそあれ第二世代の家庭でよく見受けられ、そこで育つ子は厳しい行動制限の背景にあるイスラームこそが周囲への同化を阻む要因だと理解し、ムスリムの属性を内心で強烈に否定する。子１も、「イスラームのことはまったく知らない、知りたいとも思わない、アッラーがいるとも思えない」と言う。

子 10：父の前ではいい娘でいたいという思いがあって。父の話はいいことだって自分に言い聞かせていました。(……) ムスリムであるという自分の属性を疑問に思ったことは何度もあったけど、父の信頼を裏切ってはいけないという思いがずっとありました。

母 C：父の期待が大きくて、長男だからすべて受け止めて期待に応えようとしてた。女ダメ、婚前交渉ダメって言いつけと、周りがみんな恋愛の話をしているギャップに苦しんで。自由に恋愛したいって思いながら、でも父には言えない。(……) 高校生くらいからイスラーム嫌いになってたけど、それを父に言えない、父の落ち込みがひどいことを知っているから。

親を愛する気持ちあるいは親に愛されたいという思いが同化願望に勝るとき、根拠や理由が示されない指示にも子は従おうと無理をする。だが期待に応えることだけを優先させ、与えられた価値観を無条件に引き受けるうちに、本来の自分を見失って精神を病む子もいれば[9)]、いつかその状況に疲弊してムスリムの属性を放棄する子もいる。

子 8：周りの同級生の子がお付き合いをしたりすることが増え、自分はそれがタブーなので、会話をすると溝をいつも感じて、なぜうちはダメなんだろうと悩んでいました。親はただダメと言うだけで、大した説明をしてくれず、ただイスラームではダメだから！としか言われなかったので、納得いかない部分もあり、好きな人ができても気持ちを打ち明けることができず、苦しい思いもしました。

親の出身国では「ムスリムだから」という説明は万能かもしれないが、ムスリムがマイノリティである環境で周囲の誰とも異なる制限に悩む子を納得させるには十分でない。子８も根拠や理由を示されない制限に困惑し、「それに恐れながらもフォローすることが嫌になってしまって、(……)『イスラームは私とは全く関係ない、私はムスリムなんかじゃない』と言ってしまった」ことを回想する[10)]。納得できる説明を得られない失望の経験もまた、ムスリムの属性を否定する原因となりうる。

2.4　服装規定により意識される差異

イスラームにおいて、女性はその美しさを覆い隠すことが求められるが[11)]、どこを隠すべきかの解釈はさまざまであり、その判断は親に委ねられる。

> 子１：水着はダメだから水泳の授業はずっと見学。たまに校庭走って来いとかって、私だけマラソンさせられたり。みんなと違うのが嫌だった。(……) みんなと同じでいたかった。だから「被り物しろ」って言われた時は、「嫌だ！」って抵抗した。これ以上異質なものになりたくなかった。

> 子 11：小５の夏休み、家族で〇〇〔父の国〕へ行って、日本に帰国する前の日、「日本に帰ったらスカーフ被るって約束して。それができないなら日本に帰さない」って、父に言われて。約束しました、日本に帰りたかったから。始業式の日は雨だったから傘で隠して行って。でも学校に着いてすぐ外しちゃった。「ダメだった」って言ったら、父は「明日からがんばろう」って。(……) 中学は制服の上からアバーヤ〔全身を覆う上着〕を着て行ってました。

頭髪を隠すためにスカーフを着用する第二世代は、実はそれほど多くない。調査協力者の中でも常時スカーフを着用している女性は９人中３人である。子１のように差異を際立たせるのを嫌って親の意向を頑なに拒む場合もあるが、そもそもスカーフ着用が一般的でない地域出身の親がそこにこだわらない場合もある[12)]。これに対し、脚が露わになることを避けようとする親は意

外に多い。「6歳でスカートはくのは禁止（子10）」という子のように、私服ではズボンの着用が勧められるが、制服でもズボンの着用を特例で認められた事例が店田・岡井（2010, p. 117）の調査報告に収められている。だが多くはスカート丈を長くするなど差異を際立たせない工夫で折り合いをつけており、差異に頓着せず宗教的価値観を優先させる子11のような対応はむしろ珍しい。

なお子11の場合、学校現場での理解があったことを付言しておく。スカーフ着用の際に「先生がクラスのみんなに説明してくれたんで、誰にも変なことを言われなかった」ほか、「中学入学の前、『こういう子が入ります』って小学校の先生が説明に行ってくれた」などさまざまな場面で教員の配慮があり、差異があっても受け入れられる経験の積み重ねが子11の自己肯定感を育んだと考えられる。だがこうした頼りになる教員が学校現場に常にいるわけではない。高校教員の何気ない一言がきっかけで中学生の頃から着用し続けたスカーフを外してしまった子[13]や、「一回、小学校に被って行った時、先生に『どうした？』って聞かれて（子9）」以来現在に至るまでスカーフ着用を拒み続ける子の事例は、教員の影響の大きさを示す。級友からの揶揄には慣れていても教員からの無理解に敏感に反応するのは[14]、かれらが学校での不快な経験の中で教員から助けの手が差し伸べられることを期待しているからである。だからこそそれに応えてくれる教員との出会いは、その後の子の生き方を左右する。

3　宗教実践に関する親からの期待

3.1　形式的な実践の強要

非イスラーム圏の日本で文化や宗教を継承するための踏襲すべき先例を持たない当時の親世代が、これを家庭内で完結すべく試行錯誤していたことは想像に難くない。調査協力者の語りにおいても、「小さい頃から『礼拝やれ』とうるさかった（子12）」など、外国人親は礼拝を強要する存在として度々登場する。

子4:何で礼拝しなければならない？って親に聞いても「とりあえずやれ」。

イスラームのこと教えてくれって言っても「そこにあるもの読め」。あとは言うことがコロコロ変わる。

子 13：イスラームの説明をされたことがない。「生まれつきだからやらなければいけない」って言われる、それが嫌。

礼拝はイスラームにおける五行[15]の一つである。だがそれは強要されてやむなく実践する義務ではなく、罪が許され天国に行くことへの期待という積極的な動機に基づいて行われるものである[16]。外国人親は愛する子が来世で幸福であるようにと願って礼拝の重要性を訴えるが、「天国」や「来世」を始めとしたイスラームの世界観を子にわかるよう説明する親は実は少なく、中には「5 つお祈りすると 50 円上げると言って礼拝させた（父 B）」親もあり、多くの家庭でイスラームはその教えの豊かさに反して形骸化する。それゆえ「礼拝するのはアッラーのためとかじゃなく父のため（子 5）」、「中学生の頃には怒られないように先読みして、言われる前に礼拝するようにしていた（子 14）」、「礼拝マットをちょこっと動かしたりして、礼拝したふりをしてた（子 15）」など、礼拝の目的は叱責を避けるためあるいは親の期待に応えるためであり、また時に小遣いをもらうための手段になる。

なぜ実践ばかりにこだわる外国人親が多いのか。「私たちも自分の子どものときに同じことやられているから（店田・岡井・小野編 , 2020, p. 19）」、また「イーマーン〔六信〕[17]もイバーダ〔五行〕もスンナ〔預言者の慣行〕も小学校で勉強した、ちゃんと教科書があって。その後モスクに行ってクルアーン〔イスラームの聖典〕の勉強。家では何も教えてもらわなかった（父 D）」という親の回想がその答えを示唆する。家庭の外にイスラームの教えを学ぶ環境が整っているイスラーム圏では、家庭ではその実践を促す声かけをするだけでよく、それを手本にした外国人親が実践ばかり強要するのは無理からぬことではある。だが家庭の外に学びの環境がない日本では、それを補うのもまた自分の役割であることに気付く親は少ない。

礼拝の実践に限らず、級友に許されていることを禁止され級友がしていないことを強要され続ける第二世代に、形骸化したイスラームはその根拠や理

由を提示しない。それでも親の叱責を恐れあるいは親の期待に応えるため「ムスリムであること」を否定できない子は、「普通であること」を満たすため級友らの前で別の自己を作り出す。「友達の仲間に入りたい、みんなと同じでいたい。だから学校ではイスラームの話はしないでバレないようにしてました(子 10)」というように、親の前ではムスリムとして生活し学校では普通の日本人として同調の努力を続ける子も多い。だがこうしたどっちつかずの二重生活は、自分とは何かの答えを見つけようとする青年期の第二世代を混乱させる。級友に話を合わせ親のために形骸化したイスラームを実践することに疲弊した子らは、「なんでこんな家庭に生まれちゃったのか (子 10)」、「間違ってこの家に生まれた (父 B)」と嘆き、その葛藤から逃れるために「ムスリムであること」を放棄する子もいる。

しかし踏襲すべき先例がない中、試行錯誤しながらイスラームの実践を伝える努力を行ってきたと自負する親には、子がムスリムの属性を放棄した現実を認めることは難しい。すでにムスリムの属性を捨て「普通であること」を選び取った子について、「ムスリムだったら礼拝するのが当たり前でしょ？それなのに、どうしてやらないのかわからない (父 B)」と頭を抱える親もいる。実はその親の努力こそが、子の葛藤を深め自己定義を困難にする要因となる可能性に親世代は気付きにくい。

3.2　イスラームの世界観を踏まえた教えの継承

家庭の外に学びの環境がない日本で、それを補うのが親の役割であると気付ける親もいる。両親ともに外国人の家庭では、「父がイスラームの歴史を教えてくれて、母が礼拝の仕方を教えてくれた (子 2)」というように役割分担も可能である。だが親の一方が日本人の国際結婚家庭では、外国人親が孤軍奮闘することになる。

> 子 10：食事中にイスラームの講義が始まっちゃうんです。一方的で反対できないからそれ以上話が進まない。(……) 小２の時、学校で習ったことを話したらイスラームではそうじゃないって否定されて、それ以来学校での話ができなくなって。もう中学以降は、一緒にご飯食べてても会

話がない状態でしたね。(……) だからといってイスラームをやめるという選択肢はなかったです。疑問に思った時期はあったけど、今はムスリムであることが自分の属性だと思えるようになりました。

父を疎ましく感じながらもムスリムの属性を維持できた子 10 は、大学卒業後にイスラームの学び直しの機会を経て「自分でイスラームを選び取った」と言う。そして親がイスラームの教えの豊かさや美しさを丁寧に伝えようとしたことを振り返り、「今までの強制がなければ今の自分はないかもしれない。うちの親はすごい」と称賛する。青年期にムスリムの属性を放棄しようとした上掲の子 8 も、イスラームの学び直しによって親がこだわった実践の意味を知り、「それが自分が求めていた生き方だと知ることができ、元々ムスリムとして生まれたことに感謝しています」と言う。イスラームの教えの理解が、「ムスリムであること」を自己の属性として受け入れるための捉え直しの契機になりうることを示している。

その点では、子が幼いうちから身近な事象や出来事を通してイスラームの世界観を伝え理解を促すことの意義は大きい。家庭の内外で役割分担をするのが一般的なムスリム家庭では、文化や宗教の継承に適任なのは日中も子と過ごす時間が長い母親であろう。これを意識した外国人母が、「イスラーム教育は私に責任があります。母語でないと伝えられないから日本語を学習しませんでした (外国人母 E)」という決断をするのも理に適っている。

子 3：礼拝やマグリブ〔夕方の礼拝〕の後のクルアーン朗誦などとイスラームの大原則のような守るべきことは譲らない母でした。(……) 自分の母語でしか、アキーダ〔信条〕やイーマーンを説明できないということで、子供たちには常に〇〇（母の国）語を使っていました。(……) 母はいつも質問に答えてくれました。答えが分からないものに関しては分からないけど、きっと意味があるといっていました。つまり「何でお祈りしないといけないの？」「いいから、しなさい！！！」みたいなことはなかったです。(……) 何で自分はムスリムだろうと疑ったことはありません。

子３の母親がこだわるのは信仰に関わる根幹の点においてであり、交友関係や趣味について制限を課すことはない。家庭の価値観が学校生活の中で衝突した時は、「『無理だと思ったら、皆に合わせていいよ。アッラーは分かってくださる』と母がいつも逃げ道を作ってくれていた」ことで乗り越えられたと語る子３は、多くの第二世代が障壁と感じる礼拝も苦にならない。級友らのいる教室ではもちろん「遊んでいる公園、映画館の駐車場でよくお祈りをしていた」ほどにムスリムの属性を自然に受け入れている。無理のない文化や宗教の継承に、母親の果たす役割は大きい。

とはいえ、すべての母親が継承に十分な知識を備えているわけではない。その不利を海外で補おうと、子をイスラーム圏の高校や大学に留学させたり、数日から数週間、宗教学校に泊まり込んでイスラームの生活を体験する「短期合宿」に参加させたりする家庭もある。

子 13:前はイスラームの居心地が悪かった。去年１か月間、〇〇〔母の国〕に合宿して初めてイスラームを勉強したら、私の中でイスラームのイメージが変わった。モスクがきれいで楽しかった。今はイスラームは嫌いじゃない。徐々に受け入れてきてる。グラデーションがある感じ。

子 4:イスラームを肯定できるようになったのは高２の時、〇〇〔父の国〕でイスラームの先生に会ってから。イスラームについて何も知らないことに気がついた。形ばかりのイスラームじゃなく人間が生きる意味を勉強していくようになったら、クルアーンやハディース〔預言者の伝承〕に書いてあることがスッと入って来るようになった。

子 15：高１の夏休みに〇〇〔両親の国〕のモスクに泊まって勉強させられた、２泊３日で、いとこと一緒に。(……) それまでは何のために生きているのかわからなくて、目の前のことをやりこなしていかなければならないつらさがあったけど (……)。高１の夏に神様を見つけた！　それからは神様が用意した道の上を歩いてる、生きる意味が決まっているからすごく楽。

海外での経験を捉え直しの契機として、子 13 はムスリムの属性を肯定できるようになり、子 4 や子 15 はもっと積極的に自己定義のきっかけを掴む。調査協力者の中で海外でのイスラーム学習経験があると確認できた 11 人のうち 10 人がムスリムの自覚があると回答していることから、そこに因果関係を見ることができる。だが滞在期間が短い場合があることを勘案すると、その影響の主要因は学習内容だけではないだろう。「宗教のことで悩んでいるのが嫌だった。高校の時留学して外を見たら、海外では宗教は普通のことだった（子 6）」という語りは、否定的に捉えていたマイノリティの属性が別の視点から眺めることで違う印象に変わることを示す。留学や短期合宿によってマジョリティを経験することもまた、捉え直しの契機のひとつになると考えられる。

3.3　子を支える親の役割

以上、主として外国人親と子のかかわり方を中心に考察してきたが、国際結婚家庭における日本人親の役割についても一言する。知識習得の機会が限られていた当時、日本人親もまた配偶者からの実践の強要に戸惑うことが多く[18]、共通の経験を有するかれらは子の最もよき理解者となりうる。

> 子 10：母ははっきりと、どんな自分でもいつも〇〇〔子の名〕の味方だと言ってくれました。道を大きく外れることなく、精神的にもおかしくならなかったのは、母の無償の愛が大きかったと思っています。

> 母 C：〇〇〔子の名〕は中学からイスラームが嫌い。でもそれを父には言えないから、嘘をついて誤魔化すのがつらい様子だった。私がそれに気付いて抵抗するようになって。大学入った時に外に出した。自由にさせてやりたかったから。

第二世代同士が交流する機会がなかった当時、孤立した子は自らの置かれた状況の特殊さを悲観し、その葛藤が世界中の誰にも理解されないものだと思い込む。子 10 が海外の第二世代を描いた映画を観て「『世の中には自分と同じ境遇の人がいるんだ』と初めて知り、けっこう心の支えになりました」

と語るほど疎外感に苦しんでいたとき、「母だけが理解者」だった。義務や禁止ばかりの中で逃げ場を失いがちな子にとって、親の一方が理解者であること、子に代わって抵抗する母Cのような存在があること、「父との間で橋渡しをしてくれる（子6）」仲介者がいることは大きな救いである。

4　おわりに

本研究は、重層的なマイノリティの要素を持つ第二世代の葛藤の様相を、当事者の経験の語りから検証することを試みたものである。外見的な差異による周縁化の経験から周囲への同化願望を抱くことは、外国にルーツを持つ子に関する先行研究でも指摘されてきたが、それに加えて、食の禁忌や行動制限、服装規定に関する親からの要求により周囲との差異を強く意識し、さらに同化願望を募らせる第二世代がいることが明らかになった。それらの要求は、日本で育つ子に文化や宗教を継承しようと専心する親たちの試行錯誤の結果ではあるが、その背景にあるイスラームについて十分な説明が行われることは少なく、多くはイスラームの理解なしに、子1や子14のように叱責を避けるためあるいは子10や母Cの子のように親の期待に応えるため、形式的な実践に従うことになる。納得できる説明が得られない失望の経験は、子8や子13のように次第にムスリムの属性に否定的な思いを抱くことにつながり、いつか親の要求に同化願望が勝るとき、子1や子5のようにムスリムの属性を放棄することになる。

一方で、イスラームの世界観を踏まえた教えの継承がなされた家庭では、子2や子3のように差異による不快な経験を乗り越えて無理なくムスリムの属性を受け入れる様子が見られる。形式的な実践に従うだけだった者の中にも、子4や子15のようにイスラーム圏での学びの機会を経てこれを積極的に受け入れられることがある。後者の場合、ムスリムの属性の肯定に影響したのは、学習内容もさることながらイスラーム圏においてマジョリティを経験したことも大きい。自らの置かれた状況の特殊さを悲観し孤立してきた第二世代にとって、そうした疎外感を払拭できる機会は大きな捉え直しの契機となる。そういう意味では、子10のように身近に理解者を得られることは大きな救いとなる。

国内113か所にモスクが建てられ（店田，2021, p. 28）、各地にムスリム・コミュニティの輪が広がる現在、知識習得や情報交換の場はかつてとは比べ物にならないほど豊かになった。インターネットの普及は、地域を超えて理解者・共感者を得る可能性を高め疎外感の軽減に役立っている。その点においては、今まさに青年期を過ごしている第二世代は、本稿の調査協力者が青年期を過ごした当時より恵まれた環境にあるといえる。だが一方で、海外でのテロ行為に呼応する世界的なイスラモフォビアの影響による偏見の増大など、新たな問題も生じている。今回論じられなかった、より若い第二世代の葛藤や捉え直しの契機となるさまざまな可能性については稿を改めて論じたい。

謝辞

調査にご協力くださった第二世代と親世代の皆さまに心より感謝申し上げます。
また、査読者による貴重なご指摘と懇切丁寧なご助言にも深く感謝の意を表します。

注

1) 店田（2018）の推計、入信した日本人ムスリムとその家族1000～2000人（同，p. 123）に、各世帯の子を「平均2人として計算（同，p. 115）」すれば、両親ともに日本人の世帯は250～500世帯と考えられる。
2) 店田（2018）の推計、外国人と日本人の夫婦1万1500世帯（同，p. 116）に、永住者である25歳以上のムスリム約2万人のうち男1万4000人、日本人の配偶者を持つ25歳以上のムスリム約4000人のうち男3000人（同，pp. 114-115）の割合を充てると、外国人夫と日本人妻の世帯数は8000を超える。これを、外国人夫婦の世帯数7500（同，p. 116）と比較して類推。
3) 本稿ではエリクソンのライフサイクルに重ねて、小学生の時期を「学童期」、中学校入学以降の10代の時期を「青年期」と呼ぶ（エリクソン，2017）。なおエリクソンは、これに前後する幼児期および成人期をそれぞれ前期と後期に分けるが、本稿はそれを詳述するものではないので厳密に分けず、まとめて小学校入学前の時期を「幼児期」、20代以降の時期を「成人期」と呼ぶ。
4) 早稲田大学多民族・多世代社会研究所ほか主催の「全国マスジド（モスク）代表者会議」には、2015年以降4回、慶應義塾大学イスラーム研究・ラボ主催の「全国ムスリムミーティング」には、2017年以降3回、自らの経験や現状を語る第二世代が登壇している。
5) 前掲注の会議合わせて7回の登壇者の半数以上が複数回の会議に登壇、中には5回登壇した者もいる。
6) 調査協力者の語りはできるだけ忠実に引用するが、必要に応じて省略した部分は「(……)」で示し、聞き取りの際に語られた国名や個人名は「○○」と伏せ字にした。

また表現を統一させるため、パパ・お父さんは「父」、ママ・お母さんは「母」、イスラム教は「イスラーム」、イスラム教徒は「ムスリム」、ヒジャーブは「スカーフ」に揃えた。

7) クルアーンには、「かれがあなたがたに、(食べることを) 禁じられるものは、死肉、血、豚肉、およびアッラー以外 (の名) で供えられたものである (2：173)」とあるほか、「アッラーの御名が唱えられなかったものを食べてはならない (6：121)」とある。アッラーの名を唱えた屠畜がなされなければ牛肉や鶏肉も禁忌と考える家庭もある一方、非イスラーム圏である日本では豚肉さえ避ければいいと考える家庭もある。

8) 1946 年の文部・厚生・農林三省次官通達により学校給食は教育活動の一環として位置付けられ、1954 年の学校給食法制定により給食の法的根拠が明確化された (文部科学省 , 2019)。

9) 個別事例の詳述は避けるが、調査協力者複数人から、感情障害や鬱で通院経験のある第二世代の話が聞かれた。

10) 2017 年 10 月 1 日開催の第 10 回国際セミナー「日本人ムスリムによるパネルディスカッション」での子 8 の発言より。

11) クルアーンには、「外に表われるものの外は、かの女らの美 (や飾り) を目立たせてはならない (24：31)」とある。

12) 筆者が別の世代に行った調査では、スカーフを着用したいという子を外国人親が押しとどめた事例がある。

13) 筆者が別の世代に行った調査では、スカーフとテロを結び付ける教員の発言に傷つきスカーフを外した事例がある。

14) 筆者が別の世代に行った調査では、教室内でイスラームとテロを結びつけた級友の発言に対してではなく、その場にいた教員がそれを訂正しなかったことに傷つき不登校になった事例がある。

15) ムスリムが実践すべき 5 つの義務。具体的には、信仰告白・礼拝・喜捨・斎戒・巡礼。

16) ハディースには、「もし、あなた方の誰か一人の家の戸口の近くに川が流れており、毎日五回そこで身体を洗うならば (中略) それはあたかも一日五回の礼拝のようなものです。アッラーはその五回の礼拝によって罪を消して下さるのです (ムスリム , 1987, p. 454)」とある。

17) ムスリムが信ずべき 6 つの信条。具体的には、アッラー・天使・啓典・預言者・来世・定命。

18) 本稿の調査協力者の日本人親の半数がイスラームを拒否しあるいは無関心であるかすでに離婚していることから、日本人親の中にもムスリムの属性に葛藤する者が少なくなかったことがうかがえる。

参考文献

安達智史 (2013)「『超』多様化社会における信仰と社会統合―イギリスにおける若者ムスリムの適応戦略とその資源」『ソシオロジ』177, pp. 35-51.

石川真作 (2016)「ドイツにおけるイスラーム運動と教育―ヒズメット運動による教育への取り組み」『白山人類学』19, pp. 57-79.

磯崎定基、飯森嘉助、小笠原良治共訳 (1987)『日訳サヒーフムスリム 第 1 巻』日本サウディアラビア協会 .

岩渕功一 (2014)『< ハーフ > とは誰か　人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社 .

植村清加 (2016)「フランス・アルジェリア系移民第二世代の学校経験と変化する学校

—パリ郊外の優先教育地区を中心に」『白山人類学』19, pp. 105-130.
エリクソン , E. H.　中島由恵訳 (2017)『アイデンティティ 青年と危機』新曜社 .
大橋充人 (2021)『在日ムスリムの声を聴く－本当に必要な“配慮”とは何か』晃洋書房 .
岡井宏文、店田廣文、小島宏編 (2015)『「ヤングムスリムの将来設計—学ぶ・はたらく・生きる」第 7 回全国マスジド (モスク) 代表者会議の記録』早稲田大学アジア・ムスリム研究所ほか .
岡井宏文、店田廣文編 (2019a)『第 10 回全国マスジド (モスク) 代表者会議「日本のムスリム・コミュニティを問い直す」』早稲田大学多民族・多世代社会研究所ほか .
岡井宏文、店田廣文編 (2019b)『全国マスジド (モスク) 代表者会議・第 2 回次世代部会「ヤングムスリムとムスリム･コミュニティ:ヤングムスリムの居場所から考える」の記録』早稲田大学他多民族・多世代社会研究所ほか .
工藤正子 (2008)『越境の人類学—在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会 .
工藤正子 (2016)「差異の交渉とアイデンティティの構築—日本とパキスタンの国境を越える子どもたち」川島浩平、竹沢泰子編『人種神話を解体する 3「血」の政治学を越えて』東京大学出版会 ., pp. 303-331.
桜井啓子 (2003)『日本のムスリム社会』筑摩書房 .
下地ローレンス吉孝 (2018)『「混血」と「日本人」ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社 .
杉本均 (2002)「イスラーム教徒における社会文化空間と教育問題」宮島喬、加納弘勝編『変容する日本社会と文化・国際社会 2』東京大学出版会 ., pp. 145-167.
鈴木隆雄 (2010)「当事者であることの利点と困難さ—研究者として／当事者として」『日本オーラル・ヒストリー研究』6, pp. 67-77.
関口知子 (2007)「在日日系ブラジル家族と第二世代のアイデンティティ形成過程：CCK/TCK の視点から」『家族社会学研究』18 (2), pp. 66-81.
竹下修子 (2003)「国際結婚におけるエスニシティの表彰としての宗教—外国人ムスリムと日本人女性のカップルの場合」『家族研究年報』28, pp. 14-26.
鑪幹八郎 (1990)『アイデンティティの心理学』講談社現代新書 .
店田廣文 (2018)「日本人ムスリムとは誰のことか—日本におけるイスラーム教徒（ムスリム）人口の現在」『社会学年誌』59, pp. 109-128.
店田廣文、岡井宏文 (2008)『日本のモスク調査 1—イスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室 .
店田廣文、岡井宏文 (2009)『日本のモスク調査 2—イスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室 .
店田廣文、岡井宏文 (2010)『滞日ムスリムの子ども教育に関する調査報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室 .
店田廣文､岡井宏文､小野亮介編 (2020)『第 11 回全国マスジド (モスク) 代表者会議「ムスリムが生きた『平成』の時代」—遺産・継承・融合・断絶・競合』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室ほか .
店田廣文 (2021)『世界と日本のムスリム人口 2019 ／ 2020 年』多民族多世代社会研究所 .
角替弘規 (2015)「南米にルーツを持つニューカマー第二世代の青年期」『桐蔭論叢』32, pp. 29-57.
野中葉監修 (2020)『第 5 回全国ムスリムミーティング「神をどう伝えるか—母と子による報告」報告書』慶應義塾大学 SFC 研究所イスラーム研究・ラボ .
樋口直人 (2007)「『ガテン』系への道 労働への適応、消費への誘惑」『国境を超える—

滞日ムスリム移民の社会学』青弓社 ., pp. 83-114.
松本学 (2002)「当事者による当事者研究の意義」『教育方法の探究』5, pp. 93-98.
丸山英樹 (2007)「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」『国立教育政策研究所紀要』136, pp. 165-174.
マンスール , アフマド　高本教之ほか共訳 (2016)『アラー世代 イスラム過激派から若者たちを取り戻すために』晶文社 .
三浦綾希子 (2015)『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ―第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房 .
三浦綾希子、坪田光平、額賀美紗子 (2016)「フィリピン系ニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティ―ライフコースの分岐と選択的エスニシティへの変容」『国際教養学部論叢』9 (2), pp. 69-96.
三田了一訳 (1983)『聖クルアーン：日亜対訳注解』日本ムスリム協会 .
宮島喬 (2016)『現代ヨーロッパと移民問題の原点―1970、80 年代、開かれたシティズンシップの生成と試練』明石書店 .
文部科学省 (2019)『食に関する指導の手引―第二次改訂版』健学社 .

〔受付日　2020. 5. 28〕
〔採録日　2021. 1. 20〕